



上代日本語の否定辞に関する研究

徐, 一平

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

1989-03-31

(Date of Publication)

2014-02-26

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲0824

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1000824>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏名・(国籍)	徐 二 平 (中華人民共和国)
学位の種類	学 術 博 士
学位記番号	学博い第142号
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
学位授与の日付	平成元年3月31日
学位論文題目	上代日本語の否定辞に関する研究

審 査 委 員	主査 教授 山 崎 馨
	教授 池 上 洵 一 教授 一 海 知 義
	教授 堀 信 夫 助教授 尾 上 圭 介

論 文 内 容 の 要 旨

この論文は、通常「打ち消しの助動詞『ズ』と呼ばれている語の上代における用法を対象としたものである。

この助動詞は、通常、「○・ズ・ズ・ヌ・ネ・○」と活用すると記述されるが、著者は、これを「ニ・ヌ・ネ」と語形を変えるナ行否定辞と「ズ」という形でのみ現れるザ行否定辞とに分けて考え、ナ行否定辞とザ行否定辞とは語源において関係を持たない別の語であるという予想を立てる。

この予想を前提として、この論文の「ねらい」は次の二点に分かれる。

- ① ナ行否定辞とザ行否定辞の語としての性格、語性の相違のあり方を論じようとする。
- ② ナ行否定辞を含む表現とザ行否定辞を含む表現とはこのように異なるという事実を全体的に見ようとする。

この「ねらい」の①は、具体的な議論の姿としては

- ③ 終止用法「ヌ」と「ズ」の表現性の相違、「ヌカ」と「ズヤ」の表現性の相違、「ヌカ」の表現性の二種類、「ネバ」の表現性、「ズハ」の表現性などを説明する中で、ナ行否定辞とザ行否定辞の語性の相違のあり方(客観的対主観的など)を論じる。

というものになり「ねらい」の②は、具体的には

- ④ 「ヌカ」「ネバ」「ズヤ」「ズハ」などの表現性を網羅的に書き上げることになる。

この論文全体の姿は、④の「否定辞用法概説書」風の網羅的記述のあいまいさに、③のザ行・ナ行否定辞の語性把握と、その観点からの事実解釈とが混在しているというものである。概説書風の網羅的記述であるから、論旨を要約して紹介することは困難であるが、調査、検討されている否定辞の用法を、この論文の構成に沿って紹介すれば下のようになる。

第1編 上代におけるナ行系統の否定辞について

- 第1章 原因・理由を示す「ニ」について
- 第2章 終止用法の「ヌ」について
- 第3章 「ヌカ（モ）」の表現について
- 第4章 「ネバ」の表現について
- 第5章 ナ行系統否定辞の上接用言について

第2編 上代におけるザ行系統の否定辞について

- 第1章 「ズアリ（ザリ）」の表現について
- 第2章 「ズ」の終止用法について
- 第3章 「ズヤ（モ）」の表現について
- 第4章 「ズハ」の表現について

第3編 平安時代に見る両系統否定辞の変化

- 第1章 ナ行系統から見た変化
- 第2章 ザ行系統から見た変化

論文審査の結果の要旨

§1 論文内容についての評価

[1-1 問題設定に関して]

「ナ行否定辞とザ行否定辞とは元来無関係の別語である」との予想そのものは、反対説もあるものの、学界の一部に一つの気分としてあるもので、著者の独創というわけではない。ただこれは、いわば証明のしようのないこととして、学界では本格的に論じられることがなかったのであるが、この論文はそれをあえてとりあげて、この予想に沿ってこの助動詞の用法の全体を検討しようとしたものである。

「ナ行否定辞とザ行否定辞とは元来無関係の別語である」という証明されていない予想を前提として議論を重ねることは、通常は許されないことである。例外的にそれが許されるのは、下の二つの場合に限られようか。

(a) 否定表現全般を検討した結果、それを深く説明するには、ナ行否定辞とザ行否定辞の語性の相違の問題として考える以外にないと論証された場合

(b) 仮に「ナ行否定辞とザ行否定辞とは元来無関係の別語である」と予想して分析をすすめた結果、「ナ行否定辞とザ行否定辞のそれぞれの語性はこれこれである」という積極的な結論が得られた場合

「要旨」で紹介したこの論文の「ねらい」の①（ナ行否定辞とザ行否定辞の語性の相違のあり方を追求する）は、トートロジーの危険をはらみつつも一気に上記（b）をねらい、そのことによって予想そのものの正しさを保証しようとしたものと思われるが、語性の相違の内容を積極的に語

ることには成功していない。また、結果として両否定辞の語性の相違の内容が言えないまでも、もし上記 (a) を論証した上でならば、「ねらい」①は「大きな問題に挑戦した」との肯定的な評価を与えられるだろうが、(a) は先行研究において証明されておらず、著者自身においても証明しようとしていない（証明の必要を認識していない）のだから、この問題設定（「ねらい」①）は挑戦自体としても積極的に評価されるものではない。

一方「ねらい」②（ナ行否定辞を含む表現とザ行否定辞を含む表現との相違を全体的に見る）は、結果として下のことが言えた場合にのみ、有効なねらいとして意味を持つ。

ナ行否定辞を含む表現の全体とザ行否定辞を含む表現の全体とがそれぞれの中である共通性を持ち、ナ行のそれとザ行のそれとは大きく対立する。

この論文においては、この結論は出ていない。「ナ行を含む表現とザ行のそれとで全体的にこう対立がある」と言えないかぎり、用例の検討を「ナ行否定辞とザ行否定辞とは元来別の語」という前提と結びつけることが不可能となり、この論文は用例集に近いものとなる。この意味で「ねらい」②、その実現としての④は、その本来の目的を失って、否定辞用法の概説的記述を目指したということになる。

このように、この論文の問題設定は学問的手順において無理であるのみならず、否定辞について何らかの積極的な主張を為すことにも結びついて行かないものであるが、それにも拘らず「ニ・ヌ・ネ」と「ズ」とは別語であろうという直感的印象、その語性の相違は何かという一般的好奇心そのものはあながちに否定されるべきものでなく、この論文はその好奇心を満たそうと試みたものとして、その意気、意欲は評価してよいと思われる。

[1-2 主張に関して]

「要旨」に紹介した「議論の姿」③は、論文全体の用例解説の底流に見えがくれし、詠嘆の「ズ」と「ヌカ（モ）」の表現性の近似を主張した部分や逆説の「ネバ」の用法を解説した部分、「ズハ」の用法を検討した部分などに色濃く現れている。しかし、その語性の把握内容（ナ行は客観的、ザ行は主観的・意志的）はとうてい首肯できないものであり、「議論の姿」③に関する側面においては、この論文の主張は承認できないと言わざるを得ない。

「議論の姿」④の面では、否定辞を含む表現の種々を詳しく検討しているものの、その検討を通じてナ行否定辞とザ行否定辞そのものが別の語であることを浮かび上がらせることには成功していない。この論文においては、「ナ行否定辞とザ行否定辞は別の語である」との見解を証明なしに行文の随所に織りまぜながら「ヌカ」「ネバ」「ズヤ」「ズハ」などの表現性を詳しく記述しているが、それはすべてこの見解を否定しても言えることである。従って、「議論の姿」④をめぐる厳密に言うなら、積極的な主張を為すことに失敗したと評価せざるを得ず、好意的に言うなら、④は、（用法の網羅的記述であって）もともと何かを主張しようとするものではなかったということになる。

③④双方をめぐる、この論文の「主張」に関して総括的に言えば、一面で誤った主張を含みつ

つ、全体としては主張を持たない種類の論文であると評価される。

[1-3 事実調査・指摘に関して]

この論文が、上代否定辞に関して誤った主張を為すもの、あるいは何ら主張を持たない種類のものであるとすると、この論文の価値は、もっぱら否定辞の用法の網羅的検討の側面に求められることになる。

この論文は、否定辞の用法をめぐって、先行諸研究の語るところを独自の詳細な用例調査によって確認し、あるいは対立する複数の説の中から肯定すべき一つを選び、場合によってはその否定表現の周延的な状況（使われる文型の特徴等）の整理にまで及んでいる。

その積極的な論点は教科書的な用法記述の中に埋没し、必ずしも明確に文章に表現されているとは言い難いが、例えば、

- 否定辞と形式動詞との接続においては「ニス」「ズアリ」になるという一般則に反して、「ニアリ」という例の存在を指摘した点
- ナ行否定辞とザ行否定辞の上接助動詞に差があるということを指摘した点
- 「ヌカ」の意味が希求になる場合と否定詠嘆になる場合とでは、文型的条件、共存する語句に大きな違いがあることを指摘した点

などにおいて貴重な発見があり、否定辞の用法記述としては、相当高度なものになっていると認められる。この点に関する調査の手堅さと努力は大いに評価できよう。

§ 2 論文に見える一般的学力、研究能力についての評価

この論文に見える一般的学力および研究能力について言えば、先行研究の学習、理解そのものは、その量においても読解の正確さにおいても、きわめて高い水準にあると認められる。また、事実調査に関する面では、調査手続きの面での技能も、調査を精密に粘り強く進める能力もきわめて高いと言える。一般的な意味での文章表現能力、日本語運用能力はきわめて高い。

以上、「論文内容についての評価」「論文に見える一般的学力、研究能力についての評価」から総合的に判断するならば、この学位請求論文そのものの学術的価値は高いとは言えないものの、然るべきテーマを選んでこの著者の能力の高い側面を有効に発揮した場合は意味のある学術研究が為される、それだけの研究能力がこの論文の中に示されていると認められる。また、中国における日本古典語の教育者としても先駆的活躍を期待すべき能力が、この論文の中に示されていると考えられる。このような能力と知識とが、この論文の中に示されていることから見て、この論文は外国人の学術博士学位論文としての水準に達しているものと判断される。

以上の通り厳密に審査した結果、審査委員会はこの論文を合格と判定する。